

もう一つの『進化論講話』（二）

——一九〇四年二月『新民叢報』掲載「進化論大略」から——

戸井 久*

はじめに

小論は前号において『新民叢報』第四六至四八号合本（一九〇四年二月一四日）に掲載された丘浅次郎の講演「進化論大略」について、その記述を追いながら、同時期の丘によるベストセラー『進化論講話』の初版本の内容との比較・検討を加えることで、「進化論大略」が『進化論講話』の大幅な要約であることを指摘した。今号はその続編として、講演の後半部分を取り上げる。

五、古生物学

解剖（学）と発生学（事実）から生物各種の特殊な形跡について考えますと、決して古代からそうであったのではないのであります。これも現在の立場から申し上げているのにすぎません。そこで古生物物について述べさせていただくことと致します。

*といひ、ひさし

埼玉大学非常勤講師

丘浅次郎は「進化論大略」（以下「大略」）の中で、まずダーウィンの進化論について説明し、次いで解剖学と発生学に示される事実を取り上げた。ここではさらに古生物学上の事実に言及することで生物進化の事跡を証拠づけようとする。これより先は『進化論講話』（以下『講話』）第十三章「古生物学上の事実」と対応しており、その冒頭にも解剖・発生学等の「此等の事実ばかりを以て生物の進化を論ずるのは、即ち現在の有様を基として、過去の変遷を推察するといふに止まるが、本章に説く所は大いに之と違ひ、古代に生存していた生物の遺体に就いて生物進化の事跡を述べる」（一）との記述がある。

古代の生物につきましては、化石を研究することで知ることができるのであります。この化石とは山を開き井戸を掘る際に得ることができらるもので、古代の動植物の遺骸が変化したものであります。しかし化石を説明するには必ずまず地球の表面の変化が如何なるものであるかを知らなくてはなりません。地殻が形成されて以来、山や海は絶えず変化しており、建設の作用、破壊の作用、運搬の作用

によって無窮の変状を演出しておりまして、古代の動植物はその地層の中で葬られることで遺骸が化石となったのであります。

『講話』にも「古生物学上で研究するものは所謂化石であつて」とした上で、右の引用と同じく「此化石といふものは一体何時頃如何なる事情の下に出来たかと詳しく論ずるには、先づ一通り地殻の変遷のことから考えてかからねばならぬ」(2)という記述がある。『講話』ではさらに地質学の見地から、地表の土砂が雨等により河から海に運搬されて次第に層を形成し、それが固まることで化石を保存する水成岩になるといふ説明が続いている。しかし「大略」ではしばらく水成岩という名称は用いられない。

地層の中で、高く突起しているのが山となり、低く陥落しているのが海となるのであります。高い山は風雨によつて破壊され、化石は常にその中で目に触れるのに対し、海底はそうではありません。故に山頂から魚の骨や貝類等のもの(化石)が発掘されますが、多くは海中からのものではありません。吾人はこのことから古代の生物の現状を研究することができるのです。故に地質学者が地層の新旧を研究するのに、皆化石に証拠を求めるのは、山地を掘つた際に、上層の化石と下層の化石が違ふ、またはこちらの化石とあそこの化石が違ふとすることで、その地層の新旧を比較して区別することができるからであります。

これに続けてようやく水成岩について言及する。

欧州各国の地質学者は世界の地層を研究したのであります。水成岩は厚さ十里以上になりますが、十里以上の厚さになるのは幾億兆年を経てのことでありましょう。今の地質学者にはその時代が憶測しがたいのであります。

『講話』にも「今日知れてあるだけの水成岩を研究し、其全体の高さを測つて見ると、日本の里程に計算して十里以上になるが、海の底に泥砂が漸々に積り、それが凝まつて厚さ十里以上の堅牢な岩石が出来るのは、凡如何程の時を要するであらうか、百年を一世紀と名づけて時の最も長い単位として用ゐて居る我々では、到底想像して見ることも出来ぬ」(3)とあり、やはり水成岩の厚さを里程で説明している。

地層を分割すると四期に分かれ、各期はまた数紀に分かれるのであります。四期においては分割しても(長さは)均しくないのでありますが、すべて化石の異同に準じて区別しますと、原始代が最も厚く、近古代が最も薄いのであります。

「大略」はここで四期の層の厚さを比率で示した「地層図」(図F)を挿入する。それによると最下層に位置する原始代は「全量の二分の一を占める」とあり、上に進んで太古代(四分の一)、中古代(八分の一)、近古代の順となっている。『講話』第十三章「地層毎に化石の

種類の異なること」には図版の使用こそないが、各層の厚さについて「始原代は殆ど全体の六割程を占めるに反し、太古代は三割弱、中古代は一割弱、近古代は僅に四十分の一に過ぎぬ」(4)とあり、「地層図」の比率と若干の違いがみられる。

地層	代	占全量	代	占全量
近古	古	八分	始	二分
中古	古	一分	古	一分
太	古	四分	代	一分

図F

原始代の(地層の)中から発掘される化石はすべて虫類であるのに対して、太古代のほうは魚類貝類で、魚類が多くを占めます。中古代はと申しますと鱈類の化石が多いのでありますが、当時の鱈は今と異なり、陸上を歩くものもあれば、空中を飛翔するもの、海を泳ぐものもあります。近古代に至ると獣類と高等動物の化石が多くなるのであります。

ちなみに『講話』第十三章二地層毎に化石の種類異なることでは、始原代(「大略」の原始代)について「化石の出ることが極めて少い」(5)とあるのみで、「大略」にある「虫類」の言葉はない。太古代は「魚類」の化石が最も多いこと、また植物ではシダ類の化石の存在を指摘するが、「大略」にある「貝類」についての言及はない。中古代の化石は「両棲類、爬虫類であるが、是も今日の蛙、蜥蜴とは種属が全く違ひ、(中略)鯨の如く海中を泳ぐ類もあれば、鳥の如くに空中を飛ぶものもあり、四足で陸上を歩くものもあれば、袋鼠の如くに

後足だけで立つものもあり」(6)と記されているが、要するに恐竜のことである。右の引用ではこのことを「鱈(類)」という名称によって説明している。そして『講話』は近古代の化石が「鳥類、獣類」のものであることを指摘し、「今日と違ひ、まだ人間の居ない頃故、陸上では獣類に敵するものは無く、空中では鳥類に敵するものはないから、両方とも十分に発達して……」(7)と記しているが、右の引用には鳥類という名称がなく「獣類と高等動物」(8)となっている。

人体の骸骨につきましては、近古代の最上層において発見することができるのであります。ここにおいて原始代から現在に至るまでを見たのでありますが、その中で発掘される化石は千変万化、比較して見てみますと、生物進化の階級が一目瞭然なのであります。

『講話』では近古代の地層について「而して石器の碎片などがあつて、人間の居たといふ証拠の確にあるのは、近古代の中でも最近の極めて薄い層だけである」(9)と記されるのみであるが、「大略」は近古代の最上層に「人体の骸骨」が位置するとし、さらに原始代の化石から遡ることで「生物進化の階級が一目瞭然」になると述べている。ここでも人間は進化の最上位に据えられるということであろうか。『講話』には地層の中の化石の分布を生物進化の階級として捉えんとする記述はなく、むしろ今日まで存在した生物個体の数と比べて、発掘された化石の種類が圧倒的に少ないことから、「化石によつて生物進化の系図を完全に知ることとは素より望まれぬことである」(10)と記して

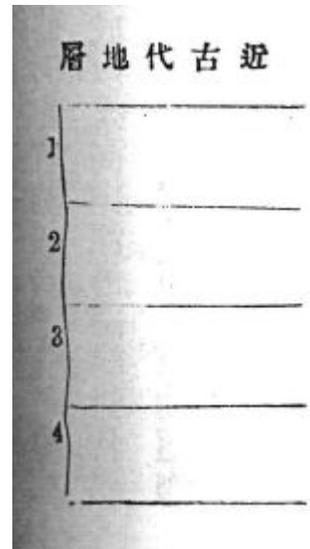
いる。

これに続けて「大略」では近世代の地層（水成岩）から掘り出された馬の化石が取り上げられる。

馬は動物の中で一つの蹄を持つ類であることが知られております。しかし昔に思いを馳せれば、決して一つの蹄に止まらなかったのではありません。ここで馬の化石に拠って研究しますと、欧米諸国において馬類の化石が最も完全に備わっているのはアメリカであります。その博物館の陳列品を調査しますと近古代の水成岩は四期に分けることができますのであります。

丘はその「四期」について図版（図G「近古代地層」）を用いて「四層に分けて上から下に掘りますと、下層に入るほどその化石の形は異なるのであります」と説明している。『講話』第十三章 四 馬の系図」にも「奇態なことには、斯く馬類の進化の道筋が明瞭に解る様に化石が完全に揃うて出たのはアメリカである」（11）とあるが、右の引用に見られる「博物館の陳列品」という記述はない。また同書では「近古代地層」に相当する図版が用いられないが、「近古代は、通常、最近の部だけを除き、残りを、上、中、下の三段に分ち」（12）という記述が見られる。

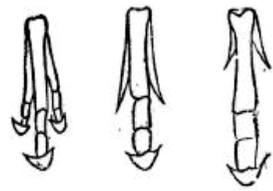
さらに「大略」では「近古代地層」の四層にある化石の相違について、「馬蹄化石図」（図H）を用いて馬の前足の変化の過程が説明される。



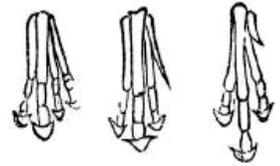
図G

図で六つの形に並べることになります。最下層の時期、馬は犬のような（体の）大きさでありまして、指は四本で中指がやや大きく地面に触れます（図H「六」）。第五形になりますと、中指は次第に発達し、蹄が一つなくなり（同「五」）。第四形では中指は太く大きくなり、小指はほとんど無くなります（同「四」）。第三形では中指が第四形と比べても太く大きくなり、第四形の小指は見えなくなるばかりか、他の二本の指も次第に小さくなります（同「三」）。第二形では中指はますます大きくなり、他の指はますます小さくなります（同「二」）。第一形に至って最上層から発見され、中指の大きさは極点に達して、即ち今日存在する馬の（蹄の）形として人々の目にするところとなりますのであります（同「一」）。

馬蹄化石圖



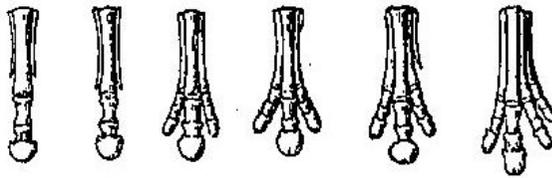
一 二 三



四 五 六

図H

第五十六圖 馬の前足の進化を示す



a b c d e f

図h

『講話』も図版「第五十六図 馬の前足の進化を示す」(図h)をもとに右と類似の説明をしており、近古代の下段が「イ」、中段の下層が「ロ」、その中層が「ハ」、上段の下層が「ニ」、その中層が「ホ」、そ

して「現今の馬」の前足として「へ」の順で取り上げられる。しかし「大略」では図H「六」と「一」を除いて化石のある層についての説明がない。また『講話』では「イ」から「へ」の六種の身体の大きさについても触れており、その上で「其他頭骨、腕の骨、脚の骨などを見ても、之と同様な進化の有様が明に見える」(13)と付け加えているが、右の引用では図H「六」を除いて、その他の五種については指の形のみ言及している。

続けて丘は鳥の化石の変遷についても簡潔に触れている。

また鳥が動物の中で最も見分けがつきやすいのは、翼があるからであります。しかし古代の鳥の化石を研究すると、最末期の時代においては蜥蜴と同じ形をしております、学者はほとんど識別できないのであります。しかし同時に思いを馳せれば、鳥と蜥蜴の区別の境目が分からなかったかも知れません。

ここでは「古代の鳥の化石」つまり始祖鳥の化石を取り上げている。『講話』第十三章「鳥類の先祖」でも、これが「丁度蜥蜴類と鳥類との性質を半分づつ備へて居る」あるいは「鳥と蜥蜴との中間に立つ」(14)ことから、かつて学者の間でもどちらの種類に属するか議論があったことが記されている。また右の引用では「古代の鳥の化石」が発見された地層については触れていないが、『講話』では「中古代の半過ぎ頃の地層」(15)としている。

以上近世の馬と鳥の化石について言及した上で、ここまでを次の

ようにまとめている。

その他の例もたいへん多く、ここでは触れません。要約しますと化石と言うのは、当時繁殖した生物がのちの時代になって絶滅した記念物であります。しかし絶種となった時代には、太古代もあれば中古代もあれば近古代もありまして、先と後が一樣ではないのであります。皆競争の劇烈なる中で、競争の能力の無い者は、ついに生存する資格なく、日に日に滅亡したのであります。例えば日本には現在象はおりませんが、地質学者が象の化石を研究したところ、東京府京橋区と横須賀等の場所で発見されたのであります。日本で実際に象がいたことが分かるのであります。生存に適さず、ついに滅亡するのみとなつたのであります。

丘はここで「絶種」「競争」「滅亡」という語を用いて、化石の分布が生存競争による淘汰の結果であることを強調している。確かに『講話』第十三章「地層毎に化石の種類異なること」でも地層間の化石の分布を概観して「恰も甲の種類消える頃には乙の種類が現れ、丙が衰へれば丁が栄えるという様に、常に新陳代謝して今日に至つた如くに感ずる」(16)、あるいは「恰も我国の歴史中に平家、源氏、北条、足利などが起つては倒れた如くに、動物界に於ても新しい類が出来れば古い方が衰へ、常に変遷して止む時は無い」(17)といった記述は見られるが、化石そのものについては「化石は古代の生物の遺体」

(18)あるいは「化石は生物の歴史の天然の記録」(19)とあるだけ

である。また右の引用にある象についても同様で、『講話』では「我国などでも、東京や横須賀辺から大きな象の骨が掘り出されたり」(20)とあるのみで、あくまでも発見された事実を記すにとどめている。

六、進化論と人間

講演は終盤を迎え、丘は進化論と人間の関係に言及する。

十九世紀に進化論が出てから、思想界、学术界は皆旧を去つて新を広げるといふ勢いがあります。凡ての教育学、社会学、政治学を研究する者で、進化論に基礎を置かないことはなく、人類の位置はこれが為に一変したのであります。

『講話』第十九章「他の学科との関係」の冒頭に「(ダーウィン)種の起原」の出版によつて人間といふ考えが此書によつて全く一変し、其結果として殆ど総べての学科に著しい影響を及ぼした」(21)という記述があり、その中でも哲学・倫理学・教育学といった「進化論以前の旧思想」(22)の上に樹立された学科の根本的改良の必要性を訴えている。しかし「大略」はこうした点には触れず、右の引用に続けて「今進化論を基本とし、人類の位置と将来の向う所の大勢を論じることによしましう」と述べ、まず人類の位置について言及する。

前にも申し上げたように身体中には耳筋、皮筋と鰓や尾等の不用

の器官が隠れていることから、人間の進化はもとも他の動物と比べても、開闢以来特別に造られたのではないことは明らかであることが分かるのであります。

丘自身が断りを入れるように、この部分は先の解剖学と発生学の事実を取り上げた内容を要約したものである。『講話』第十八章「自然に於ける人類の位置——人体の構造及び発生」でも「解剖を調べても、発生を調べても、(中略)身体の構造上からいへば、人間だけを他の禽、獸、蟲、魚から離して、其以外の特殊のものに見做すべき理由はない」(23)という記述がある。なお同章では、自然界における人間の位置付けとして、猿類と共同の先祖から起こった「獸類の一種である」(24)ことが幾度となく繰り返されている。「大略」はこのような直截的表現を取らないが、右の引用も含め、以下人体のあらゆる構造が他の動物と何ら違いのないものであることを力説する点では『講話』と考え方が変わらない。

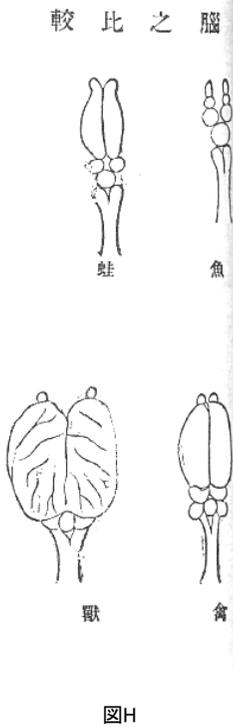
人間の身体、筋肉、内臓につきましてはしばらく述べませんが、骨格について見てみますと、猿と少しも異なることはなく、猿の骨と人間の骨を比較しますと一目瞭然なのであります。異なる所につきましても大小、長短のみに過ぎないのであります。

『講話』では、人間の身体を犬猫等の骨格と比較して「又、骨格も其通りで、頭骨、脊骨、肋骨等を初め、四肢の足に至るまで、全く同

一の型に随うて出来て居て、単に少しづつ長短、大小の相違があるだけに過ぎぬ」(25)と記している。

また動物と人間の脳の部分(原文:「脳部」)の組織も全く差違が無く、幅が広い狭い及び大小だけであります。(他の)生物を見ると脳の部分は魚類に至って最も小さいのであります。その理由は考えてみるに値します。

この直後に図版(図I「脳之比較」)が挿入される。『講話』では図版は用いられていないが、「犬、猫との人間との脳髓の相違は主として大脳の発達度にある」(26)とした上で、それでも脳の仕組み自体は他の獸類と同一であると記されている。また右の引用末尾で「その理由は考えてみるに値します」と含みを持たせた言い方になっているのは、おそらく人間の胎児の脳の形状が「脳之比較」にある魚・蛙・禽・獸の順序で発達し、やがて人間の脳の形になるということを示唆しているものと考えられる(27)。



図H

七・進化論と世界情勢

講演の締めくくりは進化論に基づく人類の「将来の向う所の大勢」について述べたものである。丘はここまで述べた生物の生存競争の原則が人類にも容赦なく貫かれていることを説明すべく、まずここ百年間のヨーロッパ人と世界各地の原住民の抗争の歴史を述べている。

百年來の生存競争の風潮は日増しに激しくなっており、仮に今日の人類の中で生活の資格を欠く者は、必ずや昔の多数の劣等動物のように惨殺されることを免れず、死亡することを免れず、滅種となることを免れないのであります。従つて少数の生存する人類によつて掌握され、世界が支配されるはずでありまして、これは必然の勢いなのであります。

今試しに世界各地の人類の現状を見ますと、オーストラリアの南にタスマニアがあります。昔は土人が非常に多かったのであります。が、ヨーロッパ人が植民に赴くと、十年を経ずして土民種族は殲滅に帰したのであります。ニュージーランドもまた然り、今日土民が存在するのは千分の一にも及びません。(中略)アメリカはコロンブスが発見する前までは紅色土民が数多くおり、ヨーロッパ人が移住して国家を建設し今日に至つておりますが、その種族(紅色土民)で存在しているのはごく僅かでありまして。(中略)他にもアフリカとフィリピン諸島等の(土着民)のように、ヨーロッパ人によつて蹂

躪された後、新種は日に日に増え、旧種は日に日に減じ、少数となつた土人は僅かに博覧会の参列品と人の玩具になるのみでありました。物競(生存競争)天択(自然淘汰)、優勝劣敗とは何と恐るべきことではないでしょうか。

つまり人類は自治を行うか人治を行うかのどちらかでありまして。人治となれば鞭を打たれ殺戮に苦しむ奴僕となり、その利権や実業は皆治者の手によつて操られ、代々受け継いだ土地は他人の手に渡り、他人が子孫を増やし民族(原文…「国族」)を集める新しい樂園となつて、愚かにも支配される種族は餓死するか、あるいは大通りで乞食となるか、あるいは山奥に逃げ込んで、辛うじて滅種となることはないのであります。諸君、私が申し上げたことを戒めとしないうでよいのでありませうか。このことは世界の公理であり、避けて通ることはできないのであります。

今日の情勢から将来を予測すれば、もし自治を行うことができないければ人治となつて進化による淘汰(原文…「天演之淘汰」)を受けることになるのであります(28)。

これまで「大略」では、生存競争によつて淘汰される生物に目を向けた言及が多かつたが、人類の生存競争を扱つた本節においてもヨーロッパ人によつて滅ぼされる世界各国の原住民のことを多く述べている。後半にある「自治」と「人治」は、文脈から判断すると前者が同じ種族(＝原住民)による治世、後者が異なる種族(＝侵略者)による治世を意味すると思われる。もし「人治」となれば、先住の「種

族」は奴隷となり、やがて「滅種」寸前まで追いやられるとしている。『講話』「第十九章 他の学科との関係」でも人類の生存競争が取り上げられているが、全体的に生存競争を勝ち抜くための具体的な施策と提言を行うことに重点を置いた内容となっている。例えば「三進化論と教育と」では、動物において「教育といふことは生殖作用の追加とも見るべきもので、其目的は生殖作用と同じく、種属の維持繁栄にある」(29)ように、人類においても正しい教育によって人種の向上を図り、他人種との競争に勝ち、人種の維持繁栄を目指すべきであると指摘している。この「人種」は「国」あるいは「民族」とも言い換えられ、これらの団体間で繰り広げられる競争とは、当然のことながら武力を行使する戦争を意味しており、これに勝利するには自己の属する団体の強化を怠らないことが必要条件とされる。また「四進化論と社会と」では、今後も人種間の戦争が不可避であることを指摘した上で、「他の人種と交通の無い処に閉ち籠つて、一人種だけで生存している場合には、劇しい競争にも及ばぬが、其代り進歩が甚だ遅い故、後に至つて他人種に接する場合には、恰もニウージーランドの鴨駝鳥の如く忽ち亡ぼされて仕舞ふ」(30)とあり、これは同章で唯一の亡国滅種のイメージが述べられた箇所である。

思うに世界の人口の増加は日一日と激しくなっておりまして、女性一人が平均四人の子を生むのでありますから全地球を総合すると年々の計算で将来には必ずや今日の何倍にもなるのであります。しかし地球上の物産(原文…「産物」)には限りがあり、人間の増殖が

尽きるところなければ、限りある経済(原文…「資生」)は尽きるところない増殖に供され、そこで競争が起こり、生存競争に適する人種が必ずや優勝し、生存競争に適さない人種は必ずや劣敗するのであります。もし優勝の人種の人口が一倍増えますと、劣等人種の方には必ずや一倍死んでしまうことになるのであります。争えば争うほど激しくなり、激しければ激しいほど勝負は決着がつくのであります。そこで亡国滅種の惨劇が上演されるのであります。

ここでは世界の人口増加と生存競争の関係について述べられている。人間の「尽きるところない増殖」による物産等の奪い合いが競争を引き起こすとあるが、その競争の行われる単位は「人種」となっている。『講話』「第十九章 三進化論と教育と」でも、主として人類の生存競争の単位を「人種」に置いているが、その理由は他の高等動物と同じく「人間は種々の団体を造つて生活するもの故」のことで、その中でも「(生存)競争に於ける最高級の団体は人種という団体で」(31)あるからとしているが、「大略」では右の引用を含め、こうした点に触れていない。

このことから考えますと、生存の道は二つしかなく、優者は勝ち、劣者は敗けるということであり、優勝劣敗の原則の根本は知識にあるのです。知識に富む者が日に日に発達し、そうでなければ滅亡するのです。したがって知識の高低は実際に種族の消長を占うこととなるのであります。しかし知識を養成し、世界を支配する国民

を造ろうというのに教育を捨ててしまつてはこれからどうなるというのでありましょうか。

『講話』では「優勝劣敗」について「唯其場合に於て生存に適するものが生存するといふ広い意味」(32)と説明するように、生物界には元々「優勝劣敗」を決める明確な基準が存在しない。しかし右の引用では人種間の「優勝劣敗の原則の根本は知識にある」と主張している。じつは傍線部分と類似する記述が『講話』刊行の翌々月に発表した「戦争と平和」(一九〇四)と題する評論の中にあり、ここでは「知識」の語が「文明」に置き換えられている(33)。丘によると「文明」の発達は人種間の生存競争の必要条件であり、また将来の日本を「真の一等国」に導くための殖産興業を生み出す原動力とされる。そして「文明」を手に入れるためには人種内で一致団結し、「人類の生存競争に於ける最有力の武器」(34)となる知力を進歩させる必要があると指摘している。右の引用の「知識」が果たして同様のことを指しているのか不明であるが、その養成は国民に対する教育如何にかかっているとすると「文明」と似ていると考えられよう。

アフリカ、オーストラリアの諸州や群島は、白人が荒地を開拓し猛獣を追い払い(領土が)分割された後、すでに僅かな土地も残っておりません。しかし西が尽きれば東に来ます。聡明な人民を集めて貪欲なる手段に出て、欧米思想が天地をひっくり返し、ひとしきりやりたい放題行うのであります。黄種の存亡はすでに決ましまし

た。今日わが抵抗の旗幟を掲げ種族を保持し国土を守る、わがアジア東部の人民は実際にその責任を負うのであります。競争の風潮が盛んな中において、相変らず安閑として聞かないふりをして見て見ぬふりをする。私は全地球を圧倒する力がごとごとく白人の手に移ることになるのを恐れるのであります。進化論の結果、白人が日に日に天狗となつて励まし合つているのであります。諸君、このことをよく考えてみられませんか。

「大略」は最後に白色人種の東漸を阻止すべく、今後の「黄種」のそれぞれの国単位による自衛を強く訴えて幕を閉じる。「わがアジア東部の人民」はその中心的役割を担うだけではなく、白人から「全地球を圧倒する力」を奪い取る必要もあることが示唆されている。『講話』第十九章「三進化論と教育」でも「今日の所で、後世まで子孫を残す見込のあるものはヨーロッパを根拠地とする若干の人種とアジアの東部に住んで居る若干の人種と僅かに二組に過ぎぬ」(35)と主張しているように、この時期(日露戦争前後)の丘には白色人種が支配する国際社会において、アジア東部の人民(種)を中心とする黄色人種がそれに拮抗し得るとする考え方があったようだ(36)。こうした白色人種の支配に対抗すべく黄色人種の連帯を訴えるという主張は、当時の日本の言論界はもちろんのこと、梁啓超に代表される中国知識人の言説にも数多く見られるが、丘の場合は黄色人種の連帯を主張しても、黄色人種による新秩序の構築といったアジア主義的な考えに立っていない。例えば『講話』第十九章「四進化論と社会」では、「若

し仮に一人種が総べて他の人種に打勝つて全世界を占領したとすると、場所々々によつて利害の関係が違へば忽ち争が起つて、数箇国に分かれて仕舞ふ」(37)と主張しているように、今後の人種間の競争(戦争)が終息しても、その先には否応なく国家間の競争(戦争)が待ち構えているのであつた。右の引用はただ人種間の競争についてのみ言及したものであるが、おそらく丘の念頭にあつたのは、人間における「生存即競争」(38)という覚悟ではなかつたか。人種が生存し発展するためには、他の人種との競争すなわち戦争に勝つしかなかく、それを否定あるいは拒否するならば「亡国滅種」の道を歩むしかないのであつた。末尾の「諸君、このことをよく考えてみられませんか」という呼びかけは、「わがアジア東部の人民」として、ともに競争の舞台に立たなければならぬ覚悟を求めたものであると指摘できよう。

八・おわりに

ここまでが講演を記した「大略」の内容である。丘はまず変種・人為淘汰・生物の増加・自然淘汰という流れでダーウィンの学説を説明し、次いで解剖学・発生学・古生物学の見地から生物進化の事実を裏付ける。その上で進化論と人間の関係について述べ、人体のあらゆる構造も他の動物と同じであることを指摘し、最後に進化論の考えに基づいた人類の「将来の向う所の大勢」について言及する。この流れは『講話』と基本的に同じであるが、「大略」は全体を通して生存競争によつて絶滅する側に目を向けた記述が多くあり、とくに人類の「将来

の向う所の大勢」について言及した箇所は、聴衆に対して絶滅への危機意識を強く喚起する内容となつている。とくにその中で「人治」によつて「奴僕」となり、ついには餓死や乞食に至る「種族」について述べた箇所があるが、丘の意図はどうかであれ、聴衆の大多数を占めたであろう中国人留学生たちは、ここでの「種族」のイメージに、長く列強の支配下に置かれ、国土分割の危機に直面していた中国民族の今後の行末を重ね合わせざるを得なかつたであろう(39)。

「大略」の興味深い特徴として、丘が人獣同祖説に立ちながら、現在のあらゆる生物の中で人間を進化の最も進んだ存在と位置付けていることが指摘される(40)。そのことは前号の動物の発生を取り上げた箇所ではつきりと述べられており、また今号の地層図に触れた箇所でもそれを示唆する記述がある。こうした見解は『講話』を含め、丘の著作には全く見ることができず、あるいは『講話』完成以前の丘の考え方の一つであつたのかもしれない。この点に鑑みると、本講演が行われた時期は、もしかすると『講話』初版の刊行以前であつた可能性もあると考えられよう。

最後に中国人留学生による丘の講演の受け止め方について触れておきたい。しかしそのことを具体的に示す資料は手許にはなく、以下に述べることはあくまでも筆者の想像であることをお断りしておく。前号でも触れたように、すでに中国人言論界においては、嚴復、梁啓超らが自著を通して進化論の学説を盛んに取り上げていたが、それらは一九世紀後半に流行した社会進化論の紹介に重きを置いたものであり、これらを通してダーウィンの生物進化論の内容を把握することは不可

能であった。それに対して「大略」は、ダーウインの生物進化論とその事実を述べた箇所が全体の約七五%を占めており、さらに図版も効果的に用いられている。確かに講演自体は『講話』の大幅な要約であり、丘はダーウイン説やみずからの進化論について、その大枠を述べるにとどめている。したがってここからは、『講話』に見られる丘の生物進化論に対する独自の考えや、また生物進化論に基づいた自説の全貌を窺い知することは到底できない。しかし日本では『講話』が世に出るまで一般向けの進化論啓蒙書が存在しなかったことを鑑みると、多くの中国人留学生にとって丘の講演は生物進化論を知ることのできる最初の機会であった可能性が高く、その意味で丘の講演は貴重なものであったはずである。ちなみに当時弘文学院生であった魯迅は、この講演の数年後に「人之歴史」(一九〇七年)という論文を発表している。

これは中国においてヨーロッパにおけるダーウイン前後の進化思想の歴史を系統的に紹介した初期の論文として位置づけられる。李冬木氏の調査によれば、魯迅が「人之歴史」の中で『講話』の記述を引用している箇所は一二箇所に達するという(41)。当日の聴講者に魯迅が含まれていたかどうかは不明であるが、丘の講演がきっかけとなって生物進化論に関心を抱き、さらに『講話』に読み進んだ者は少なくともあったのではないだろうか。その意味でも本講演を筆録した「進化論大略」は、中国人留学生にとって本格的な進化論理解を得るための重要な第一段階であったと位置付けられるのではあるまいか。

(1) 国立国会図書館デジタルコレクション所蔵、丘浅次郎『進化論講話』四三四頁。前号と同じく、小論における同書からの引用は、すべてこれによった。

(2) 同四三五頁。

(3) 同四三八頁。

(4) 同四五〇頁。

(5) 同四五〇頁。

(6) 同四五五頁。

(7) 同四五六〜四五七頁。ここでの「獸類」とは「哺乳類」のことである。前号でも触れたように、丘は『講話』の中でも「哺乳類」よりも「獸類」の語を多く用いていた。

(8) ここでは「獸類(哺乳類)」と「高等動物」と併記しているが、両者の具体的な区別については不明である。なお丘は『講話』第八章「自然淘汰 三 高等動物と下等動物」の中で「動物界に於ても人間社会に於けると同じく、分業の行はれる度を以て高等と下等との区別の標準とすることが出来る。身体各部の間に分業が行はれ、組織間に相違が生じて其ため構造の複雑になつた動物を高等動物と名づけ、分業が行はれぬため構造の未だ簡単な動物を下等動物と名づける(二二三頁)」と説明している。

(9) 同四五〇〜四五二頁。

(10) 同四四三頁。

(11) 同四六七頁。

(12) 同四六八頁。

(13) 同四七〇頁。

(14) 同四六〇頁。

(15) 同四六二頁。

(16) 同四五四頁。

(17) 同四五八頁。

(18) 同「第十三章 一 古生物学の不完全なこと」四四二頁。

(19) 同四四七頁。

(20) 同四四七頁。

(21) 同四四八頁。

(22) 同四四七頁。

(23) 同六九七、六九八頁。

(24) 同七二三頁。

(25) 同六九〇頁。

(26) 同六九三頁。

(27) なお『講話』第十九章 他の諸学科との関係 一 進化論と哲学と」では「生物発生の原則」の観点からこのことを説明している。

脳髓が漸々発達して今日の有様になったことは、化石学上にも事実の証拠があるが、一個人の発生を調べると、全く同様なことを発見する。最初脳髓の極めて簡単な頃を略して、其次の時代からいへば、先づ胎内四箇月位の時には、大脳の両半球とともに表面が平滑で、一向、溝の如きものもなく、殆ど兎の脳髓の如くであるが、漸々発達して複雑になり、大脳の表面に種々の裂溝、回転等が現れ、八箇月頃には全く狸々と同じ位な度に達する。(中略) 発生学の所で述べて置いた生物発生の原則といふことは、人間の脳髓の發育、思考力の進歩等にも実に善く適する様に思はれるが、之によつて人間の実際進化し來つた経路を、余程までは推察することができ

る。(七五二、七五三頁)

(28) 引用の原文にある「物競」「天演」とは、元々は嚴復訳『天演論』(一八九八年)の中で用いられた訳語である。

(29) 『進化論講話』七六九頁。

(30) 同七七九頁。

(31) 同七二二頁。

(32) 同二〇二頁。

(33) 「今日の人類種属は文明か滅亡かの中孰れか一を選ぶの外に途はない。他種属に負けぬだけの速力で文明の方向に進まねば到底滅亡を免れぬ。今日の世界の有様を見るに、文明の高い種属は日々膨張拡大し、文明の低い種属はそのため漸々圧迫されて滅亡に傾いて居る。更に懸隔の甚だしい野蛮種属は犬猫同然に文明人種に飼はれざる以上は続々死に絶えて仕舞ふ」(国立国会図書館近代デジタルコレクション所蔵一九〇六年開成館版『進化と人生』所収「戦争と平和」一五二、一五三頁。なお同書の目次には初出として「明治三十七年四月青年界に掲載」と記してある)

(34) 『進化と人生』所収「戦争と平和」一五四頁。

(35) 『進化論講話』七七三、七七四頁。

(36) 例えば明治三五(一九〇八)年十月『中央公論』に掲載された「人類の生存競争」(後に一九一一年開成館『進化と人生』増補版に収録)の中でも「従来は世界の有力な国は総て白色人種によつて造られ、其間で互に相争ふて居たのであるが、若し今後黄色人種の中に有力な国が出来て、白色人種の国と同等の位置を占めるに至つたならば、国際間の競争の状態に新しい一変化が生ずることが無いであらうか」(『進化と人生』増補版一六七、一六八頁)と述

べている。

(37) 同七七七頁。

(38) 同七八〇頁。

(39) 例えばこの時期、鄒容(一八八五〜一九〇五)の書いた革命宣傳書『革命軍』(一九〇三年)がとくに中国内外の青年知識人に多大な影響を与えていた。

その中に「革命には必ずまず奴隷の根性を除去しなければならない」と。そうでなければ、このように進化があり、生存競争があり、国民のいる国が、わが中国に群がって手をつけている以上、わが同胞はまさに今日の奴隷から、数重の奴隷にすすんで、猿・猪・貝になり、そして荒れ果てた大陸は、人煙の絶えた砂漠となるであろう」という記述がある。この他の中国人留学生雑誌でも中国滅亡論に関する言説が多く見られる。

(40) ちなみに小原嘉明『入門! 進化生物学』中公新書、二〇一六年)では、今日でも一般的に見られる「人間が一番進化しているという誤解」について、生物の「適応」という観点から、「それぞれの環境に適応しているという点では、それぞれの動物は動物界の先頭に立っている。換言すれば動物はそれぞれの環境への適応については、みな第一人者であり、エキスパートである。すなわち動物はみなそれぞれの環境で進化の先頭に立っていて、横一線に並んでいるのだ」(四六頁)と説明している。

(41) 李冬木「鲁迅と丘浅次郎」上(『文学部論集』第八七号、佛教学術委員会文学部論集編集委員会編、二〇〇三年)